

## 日本の農業あれこれ(89・10・19 東京分館)

森田 勇吉(昭22文丙)

私、大学出て、農林省へ入って、今、農林漁業金融公庫という所におるものですから、農業の話をして、商売の宣伝をするのが筋であろうと思ってるわけです。それで、日頃農業なんかあまり御関心のない皆様に、その辺についての若干雑談をさせて頂きたいと思います。

農林漁業金融公庫というと、名前が長いものですから、農林公庫と云っておりますが、この農林公庫というのは、組織は千人足らずの、中程度の組織で、その中で、今は人事担当をやっています。人事担当をやっても、まあその程度の組織ですから、そんなに人事が難しいわけでもないし、労使関係も比較的穏やかなものですから、現在の所、楽な商売しておるわけですから、今年あたり、一番、頭を悩ましたのが、例の学生の採用。どうやって確保してゆくかということであります。九百何十人といえますと、やっぱり、二五人〜三十人位の学生を毎年採用してゆかないといけない、それが、なかなか楽ではないわけです。金融公庫というと、親方日

ノ丸で楽だろうということで、最初は、沢山資料請求なんかがくるわけですけども、農林漁業という名前が上にくつくと、学生の方も余り興味を示さなくなるという事です、今年の場合だと、一番最初に千八百人位接触をして来たんですけども、大体それがコロコロと落ちていきまして、具体的に残ったのが四・五百人、それが本店なり支店なりに顔を出してくると、その中で若い連中なんかに会わせながらセレクトをしまして、百五十人位を残して、それをもうちょっと当って行って、まあ半分の七十〜八十人については、私自身、全員のゆる面接をして、かなりの時間一人一人話をしたわけです。

その中で、私の立場で聞いていきますのは、君達、農林漁業、とくに農業というものに、これから一生、職業生活四十年位かかざらわって本当にやってゆく腹がまえがあるのかね、と、自身の問題としてそんな風に考えられるのかということ、我々の方は聞いてゆくわけですね。というのは、例えて云うと、今年の学卒者、これは大学・短大・高校・中学・各種学校も含めて、概ね百何十万人という人間がいる。百何十万人の中で、今年四月に、ともかく学校を卒業して農業に就いた人間は、一体何人いるか知ってるか、という風に聞きますと、これを知ってる学生は農学部でもいません。五万人とか三万人とか云う返事が返って来るんですけども、これは正確に統計がありまして、今年の四月一日の学卒者の農業就業者は二百百人です。日本全国で市町村が三千三百です。農協は、農協といっても制度的にいろいろあるんですけども、所謂農協さん

と云って旗立てて歩いているあの農協の数が、総合農協が四千あります。三千市町村、四千農協があつて、そして学卒者で農業に入る人間は、日本中で二千百人しかいなかった。去年は三千五百人いましたから、今年は又ぐつと減つたということですね。それ程、農業というのは、若い人も入っていない様な衰退産業になつておるんだぞと。しかも、そういう連中が農業に入ると、今度は嫁さんの来手がないわけですね。大体女性が興味を、何らかの意味で魅力を感じない様な産業というのは、まともな産業ではないんだよと。仕方がないから、嫁さんはフィリッピンから輸入するかとか、こういう話になつてゆくわけです。君達、本当にそういう様なものと今後一生つき合つてゆく気があるのかどうか、二日でも三日でも考えて、その気があるなら、も一遍直出して来いと云いますと、大体三分の一は脱落しますね。五十人位が残つて来る。

その五十人について今度は、それじゃ、君達は、何故これから農業というものが日本国の中で存在し得ると考えるのか、ということを書いて参ります。地球上に今人口が六十億位ですが、六十億の人間が生きてゆく為に地球上に食糧を供給する農業というものが必要だ。これは当然ですけれども、では日本の上にいる一億二千万の人間が生きてゆく為に、日本の農業というものが本当に必要なのかね、どう考えるのか。それが社会的に必要なか否かだやなんていう風な事になつてゆくとすれば、乃至は趣味でやつてればいいんだよという様な事になつてゆくとすれば、君達は一生を非常につまらない仕事をやつてゆくことになるんだぞ、どういふ風に考えるのか、

と云いますと、これはやっぱり学生だからいろいろ幼いことを云います。しかし、おしなべて云うのは、ともかく一億二千万の人間が生きてゆく為には、食糧の供給というものが必要だろうという話が出て来ますね。それが、もうちょっと頭を使った人間になると、食糧供給というのは世界的に果して安定的なものかどうか、これは非常に不安がある、異常気象だってあるじゃないか、こういう様な話が出て来るわけです。異常気象なんてのは、これは学者が異常気象があるんだと云うから、あるのかも知れませんが、私等見ても、例えば健康診断やりますよね。健康診断で、診断技術が進歩すると有病者が増えて来るわけです。それと同じ様に、地球上の通信手段や観測手段がどんどん発達しますと、これまでアマゾンの奥地で異常気象があってもだれも知らなかったのが、どんどんあつたということがはつきりして来る。相当部分そんなものじゃないかろうかと私は思っています。それにしても異常気象が増えた増えたと言われているのですから、やっぱりきつと増えたのでしょう。

それから、大戦争でも起つたら一体どうなるのか、そういう時に果して日本人は、生きのびられるかどうかという様なことを云う学生がいる。これは安全保障論みたいなものですね。数年前は安全保障論というのが随分云われたわけですけれども、日本の国内では余り定着せずに、今はほとんど消えておるわけですけれども、実は、安全保障論というのは、日本国内よりもアメリカとかヨーロッパの方がずっと皆意識している話である。アメリカなんかは食糧が非常に余って

るわけですから、食糧の安全保障ということを特に声を大にして云わなくていいわけですから、意識の中では非常に強く持っているということが云えると思います。だけど、そういう事を云う学生がいる。それは、まあ若干頭を使った学生ですね。

もうちょっと頭を使うと今度は、ともかく、世界の中で日本がいろんな力を発揮してゆく時に、食糧の相当の安定的な供給がないとバーゲニングパワーが持てないではないか、という様な云い方をする連中がいるわけです。これも、それなりに本当でしょう。ともかくこの様な理由で、農業というものは、将来共に必要である、私はこれに一生をかけてもいいと云う様なことを云うのが一つの類型ですね。

その次の類型としましては、これは農業よりも林業が中心になるかと思えますけれども、国土保全とか、環境の保護とか、景観の維持とか、酸素の供給とかそういう観点からその様なことを林業なり農業なりという形を使ってやってくべきである。必要である。従って日本の林業なり農業なりなんていうものは、そう簡単になくなるものではない。重要性が消えるものではないはずだ、だから私はこの世界に一生を賭けようと考えているという云い方をする学生があります。

それから、もう一つの類型としましては、かなりムード的になるんですけれども、まあ云ってみれば、柳田国男の世界ですね。日本民族の文化・伝統という様なもの、これはどこの民族でも同じでしょうけれども、文化伝統というものは非常に原初的な食糧生産、農業生産みたいなもの

に根ざしているはずだ、従つて農耕社会とか、狩猟社会とか、色々類型はあるかも知れないけれども、日本民族の文化のバックボーンというものを維持してゆく為には、農業というものは、農業生産を含む農村ということなんですよけれども、農業というものがなくなるはずはないんだと、現に、村祭りがなくなつては困るではないかと、こういう様なもの云い方ですね。これも確かに、そういうものはあるわけですし、例えば、アメリカへ行つても、アメリカンスピリットの根元には、大草原の小さな家とかそういうものがあることは確かなんです。だから、そういうものを守らなきゃいかん。従つて、……と、こういう理論になるわけですね。

大きく云つて、学生の云うことは、まあまあその三つの類型に分けて考えていいんだらうと思ひます。どれもこれも、それ相当の理屈を持つてゐるし、それから、翻つて云えば、世の中で云われてゐる農業の位置づけというのも、結局はそういうことであるのかも知れません。只、そこで又我々の方が、学生に云いますのは「それは解つた」と。解つたけれども、君達の云つてゐることはどれを取つても、経済と云うか産業としての重要性については全然ふれてないではないか。酸素を供給してもそれを金を出して買つてくれる訳ではない、農林漁業金融公庫というのは金を借す所ですから、村祭りの為に財政資金を借してゐるわけじゃない、この所は一体どういふ風に考えるのか、と云うと大体学生は絶句してしまいますし、正直、私だつて、それに対して充分な返答はとても出来ません。出来ませんが、そこで私なんか感じましたのは、昨年・一昨

年の学生に比べると、今年の学生の云うことは、非常に様になって来たと言いますか、厚みが出て来たのか、深みが出て来たのか、ということが概して云えるだろうという感じを強く持つてるわけです。これは、やっぱり昨年・一昨年に比べて、今年というか、昨年の夏よりも今年の夏の方が、農業をめぐるいろんな議論というのが、新聞の上でもぐっと深まって来た、という風に恐らく云っていいんだらうと思います。

と云うのは、例の自由化の話ですね。それが非常に現実的になって来た。牛肉も自由化するんだ、柑橘も自由化するんだ、十二品目は自由化するんだ、米は一体どうするんだと、こういう段階に入つて来たものだから。それ以前の議論というのは、最近日本へ来てる、ヒルズ通商代表が云つてると似た様な話でして、もっと自由化しろ、自由化すれば日本の食糧品の価格はもっと下るんだ、消費者はもっと喜ぶんだ、自由化をすることによって日本の農業生産を縮少すれば、土地もそれだけ供給出来るではないか、土地問題も解決出来るではないかと、これはヒルズさんに限らず、日本の中の議論として、それが充分にしっかりと存在してたわけですよ。それに対して農業サイドは一体どうしたかと云うと、農業団体なんかははち巻しめましてね、自由化反対闘争とか、米価闘争とかいってやっておつた。云つてみれば農業の外からの話は云いっぱなし。農業サイドからの話も云いっぱなし。お互いに云いっぱなしの議論だけが続いて来た。従つて、農業をめぐるいろんな話つていうのは非常におもしろくない。おもしろ味のないままで、ずーと

これまで来てしまったという風に云つていいと思ふんです。それが、この一年間の世の中の動き、それからこの間の参議院の選挙ですね。参議院の選挙でジャーナリストティックには、リクルートと消費税と女性問題が三点セットとよく云われるわけですけれども、もうちょっと真面目な世界の話では、リクルートと消費税と農業問題の三点セットという風に云われているわけです。と同時に、所謂農業議員の大物が軒並落選してしまつたという様な状態になる。そうなりますと農業サイドも、はち巻しめて反対——と云つてるだけではすまなくなつてきておる、という様なことだと思ひます。

消費税のこともそういうことでしょうかね。消費税撤廃と云つてる分には、云いっぱなしで、いくらでも云えるんでしょうけれども、本当に参議院でああいうことになつて、消費税廃止法案を出さなきゃいかん、出すという段階になつた時には、本当に撤廃してどうするのかという様なことを、いや応なしに真剣に考えなきゃいかん段階に入つて来るわけですね。それと同じ様に農業問題というのも、農業サイドも反対！と云つただけではすまない状態になつてきたと同時に、今度は、自由化論者の方も、自由化しただけで、果していいのかどうかという問題を真剣に考えざるを得なくなつて来た、というのが現在の状況だろうと思ふわけです。と同時に、そういうものが新聞なんかにも、どんどん反映されて来ると、そういうものを読んでる学生なんかの考へてゐることも非常に深みが出て来ている。去年に比べて非常に大きい違いだろうと思つてるわけです。



とは云うものの、自由化という問題は、現に出て来ているわけですし、それから、農産物の価格問題なんてというのは、非常にはつきりと議論の対象になって出て来ておるわけですね。今、配りました資料、表①・②に物価水準の国際比較とか、小売価格の国際比較という欄があります。これは、二・三週間前に経済企画庁が発表した物価レポート89ってやつ、日経に載ってたのを切りぬいてコピーしたんですけれども、ここで云っております様に、米の場合には、ニューヨークの三倍よと。食パンは大体似た様なものです。けれども牛肉も三倍以上ですよとか、そういう風な数字が出ている。今朝の新聞に出ていましたどこかの調査でも、家賃と牛肉が高いという風にサラリーマンが考えているという様なものが出ています。従って、今や日本は牛肉が高いんだというのが固定観念になって出来上っておるわけですね。その問題は、やっぱりほっておくわけにゆきませんし、自由化ということになれば、これは現実の問題になって来るわけです。その価格差というものをどうするかというのが現実の問題になって来るわけです。只、そこでね、例えば牛肉の値段というものを取り上げてみますと、牛肉のお値段の問題というのが従来はムード的に議論されて来ておった。例えば、アメリカ人が日本へ来るとオークラカインペリアルでステーキを食うと、ステーキが五十ドルした百ドルしたとこういうわけですね。大変なことだ、日本の牛肉は高い。自由化すれば日本の消費者は喜ぶはずだという話になるわけです。これは私も別に自分で詳しく調べたわけじゃないですけども、ホテルの牛肉というのは、そんなにいいも

表① 物価水準の国際比較

(東京=100)

項目		ニューヨーク の相対価格	ハンブルクの 相対価格
総	合	72	68
商 品	食料品	69	64
	規制品目	57	55
	非規制品目	80	74
	耐久財	76	88
	自動車	81	112
	娯楽用耐久財	83	86
	家事用耐久財	54	80
	その他耐久財	69	73
	被服・履物	67	71
	その他商品	79	89
大 制 度 的 要 因 の 品 目	エネルギー・水道	44	70
	運輸・通信	70	93
	運輸	88	87
	通 信	65	104
	保健・医療	106	24
一 般 の サ ー ビ ス	教育	108	52
	家賃	54	51
	土地利用型サービス	37	69
	その他サービス	118	78

◇食料品のうち、規制品目は参入規制、価格支持、輸入数量制限のどれかが行われている品目、非規制品目はこのような規制がない品目。

◇娯楽用耐久財は時計、電卓を含む。家事用耐久財は冷暖房機器を含む。その他サービスは外食を含む。

為替レートは昨年平均

1 ドル = 128.15円

1 マルク = 72.97円

表② 小売価格の国際比較

品 目	単 位	東 京 (円)	換算価格(円)	
			ニュー ヨーク	ハンブ ルク
米	10kg	3,780	1,342	4,666
食 パ ン	1kg	363	329	305
牛 肉(肩肉)	100g	353	110	124
ロ ー ス ハ ム	100g	292	123	138
鶏 卵	1kg	288	218	363
タ マ ネ ギ	1kg	202	132	109
紅 茶	25袋	348	248	277
ス パ ゲ テ イ	300g	144	133	96
背 広 服(冬物)	1着	57,420	36,328	36,412
男 子 革 靴	1足	9,424	9,433	13,127
カラーテレビ(21型)	1台	104,400	58,894	118,879
ビデオテープレコーダー	1台	64,650	60,370	87,491
カラーフィルム(24枚撮り)	1本	503	391	507
ガ ソ リ ン	1ℓ	121	36	69
理 髪 料	1回	2,778	1,282	2,335
パ ー マ ネ ント 代	1回	5,783	7,689	8,932
映 画 観 覧 料	1回	1,492	897	730
洗 濯 代(背広上下)	1着	884	978	927

◇1988年11月調査。東京は総務庁「小売物価統計調査」、ニューヨーク及びハンブルクは経済企画庁職員の現地調査による。

◇調査銘柄の特定は行わず、できる限り類似のもので比較した。

為替レートは昨年平均

1ドル=128.15円

1マルク= 72.97円

のは一般的に使ってませんね。特殊な専門店やホテルの最高級メニューはともかくとしまして。まあまあ見えますと、今、牛肉の値段というのは、この表では肩肉が、東京が三五三円、ニューヨークが一〇〇円。ハンブルグが一二四円と出ていますけれども、スーパーあたりで見ますとステーキに出来る肉というのは、今、輸入牛だと百gが大体三〇〇円台と云っていいでしょう。それが、乳雄だと、もうちょっと高い四〇〇円代位かな。それから和牛、黒毛和種とかが中心になるわけですけど、これだと、大体六〇〇円から八〇〇円見当と云っていいでしょう。非常に特殊な松坂牛になりますと、千円から二千円・三千円、大体四千円どまりと云っていいでしょうか。余程特殊なものは百g六千円位。ホテルで使ってる肉というのは、最高級からコーヒージョップまでいろいろある訳ですが、大体は小売りにすると千円位の肉だろうと思います。そうすると、二百g使うと小売にすると二千円位の小売価格の牛肉を使ってステーキを作っておるんだろう。ホテルの仕入れは大口ですから、仕入れではまあ千五百円位の肉を使ったと考えて見ましょう。ホテルのステーキハウスのステーキは、七千円見当だと思います。そうすると、牛肉の原価の千五百円と七千円の間五千五百円は、これ何だと云うと、これは云うまでもなく、技術料であり、人件費でありサービス料であり、ホテルの償却費であり、それからその利潤であり、という様なものが積み重なっておるわけです。そういう風にして七千円というのは高い高いとアメリカ人が云う。それは一体何に金を払ってるかと云うと、ムード的な云い方をしますと、日本の東京の土

地価格と、それから日米の為替レートに対して金を払ってるのが大部分である。これ正確ではありません。経済学的には正確じゃないんですけれども、ムード的に云えば、そういうことになってしまっただろうということです。

そこで、も一つ牛肉の仕入値が千五百円とすると、その構成の内容はどういう風になるか。牛肉の場合、何とかの場合と細かく云い出すときりがないんですけれども、消費者レベルで、消費者が食糧品に対して使う金額の中の、おおよそ三分の一、学者によって三割切るといふ人もいますけれども、おおよそ三分の一が生産者の受取り額といつていいでしょう。三分の二が消費者に渡るまでの流通加工経費という風に云つていいと思います。学者の計算したのが、その辺に集中している。従いまして、千五百円の牛肉の生産者部分というのが五百円見当ということになる。さっきの話の様に五十ドルのステーキは高いと。従つて日本の肉牛生産を合理化しろという話になるわけですけれども、肉牛生産というレベルでの五百円を、例えば、二割合理化しますと、百円下りますね。そうすると、七千円のステーキは六千九百円になるはずだと。従つて自由化しろという様な話になりますので、少くとも、これまでのいろんな自由化をめぐる議論には相当大きい飛躍があるということが云えるわけです。この数字は決して厳密じゃないですけれども、大まかに云いますと、そういうことになって来る。例えば、生産農家段階ではコストを半分にする、ステーキは六千七百五十円になるはずであるということですね。どなたでもお分りの様にコスト

を二割下げる、半分にするというのは大変なことです。そういうことですので、その所の飛躍ということ、これを、これ雑談みたいなものですけれども、相当頭に置いておきませんと、この辺の議論というのは、ややもするとムードに流れてしまふということになるわけです。

とは云うものの現実に自由化というものは、これから行なわれてゆく。行なわれてゆくということになりますと、ステーキの七千円がいくらになるにしても、ともかく原材料の牛肉の値段というものは、やっぱり外国とある程度合わせられる形になっていかないと全部つぶれちゃうわけですね。そこを一体どうするかというのが、これからの農業サイド、農業内部で考えなければいけない、解決しなきゃいけない問題になってくるわけです。その所になると、非常に話が難しくなってくるのです。

そこで又、紙をご覧頂きたいんですが、今の所、物価の優等生と云われているのが卵ですね。大体、十年から十五年、全然値段が変わっていません。給料が相当上っているんですけども、値段が変わっていない。どうしてかと云うと、厳密に云えば、いろんな原因があるんですけども、農業というのは全体としては、やっぱりおくられているといえますか、おくられていることとは、規模の経済が働く余地が未だ相当ある分野だということになるでしょう。スケールメリットですね。そこで表③に採卵鶏というのがありますね。そこをご覧頂きますと、これは農家一戸当りの飼養頭羽数ということで、昭和四十年は二七羽平均です。それが昭和六三年では千三百五

六羽ということ、丁度五十倍位です。五十倍まで拡大したものですから、卵のコストというのは、確かにはつきりと下ってるわけです。だから、規模を拡大して生産を合理化すれば、コストは下るよ、という非常に単純な経済の原則がここでは働いていると云っていいわけです。その右側にプロイラーというのがあります。プロイラーは、同じく八百九二羽から二万五千四百羽になっている。二八倍ですね。しかも、これは云ってみれば、あくまでも平均です。卵で云うと、じいさんばあさんが小遣稼ぎにやってるのも一戸に入ってます。我々、今都会に住んでる人間が買

表③ 1戸当り平均飼養頭羽数

	乳牛	肉牛	豚	採卵鶏	プロイラー	1戸当り耕地面積
昭和40年	3.4頭	1.3頭	5.7頭	27羽	829羽	106.0a
45	5.9	2.0	14.3	70	3049	107.3
50	11.2	3.9	34.4	229	7596	112.5
55	18.1	5.9	70.8	620	14200	117.2
60	25.6	8.7	129.0	1037	21400	122.9
63	28.6	10.2	203.9	1356	25400	125.4

つて卵、スーパーで売ってる様な卵というのは、まずまず五万羽以上の生産者が作ってる卵だと云っていいですね。八割方はそういう人が供給している。ブロイラーが一生産者当り十萬羽程度と云っていいでしょう。その位に、採卵鶏なりブロイラーの世界は合理化が進んだ。その左側の養豚を見ますと、五・七頭が二〇三・九頭になつてゐる。これも三六倍です。これは、あんまり、じいさんの片手間というのでないですから、平均が二〇三頭ですが、普通の肥育農家は千頭以上といつてもおかしくない。それ位に規模が拡大している。コストは非常に節減された。合理化されたということになります。

所がその左の牛になりますと、これは乳牛が三・四から二八・六で八倍。肉牛が一・三から一〇・二で七・八倍。これは、そういう風に五十倍、六十倍、何十倍という風には、なかなか増えてこない。どうして増えて来ないかと云うと、実は牛というのは、土地が要るんです。鶏というのは、云つてみれば工場生産ですむわけですけれども、牛というのは土地がないと飼えないという宿命があるわけです。都市近郊の牛というのは土地を使わない非常に特殊な飼いはあるんですけれども、だけど、普通は土地がないと牛は飼えない。土地の方の制約があるものですから、なかなか増えていかない、という様なことになるわけです。

ついでをもつて、その一番右の所をご覧頂きますと、一戸当り耕地面積というのがあります。これは、一〇六アールから一二五・四アールと二割も増えてないですね、この間に。大いに増や



表④ 農業総生産額の内訳（62年）

耕種作物 計		71.6%
うち 米		30.9
	野菜	19.9
	果実	7.7
養蚕		0.5
蓄産		27.2
うち 肉牛		4.7
	酪農	7.8
	豚	6.5
	鶏	7.4

るわけです。これは、そもそも土地が狭いよということもありますし、これも手離さないよということもありますし、それから、景色を見ればわかるんですけど、云うなれば全く手付かずの土地なんて云うのは、日本にはないわけですね。道路も走ってるし、鉄道も走ってるし、家や工場は一杯建ってるしと、そういう家を全部取っ払ってしまえば、これは大きい農地が出来ますけれども、例えて云うと八郎潟の干拓地とか、そういうものは確かに出来るんですけども、そうでない限りは日本の国内では、現実にそういう土地の

そうとって、いろんな政策をやる人は、ここの所を一所懸命にやったわけですよ。鶏なんて云うのは、云ってみればほっちらかして、これだけ増えてしまった。事実上ほっちらかしてすね、豚も、まあ云ってみれば相当程度にほっちらかして、こう増えて来た。土地を使うものというのは、何とかしてやろうとって、いろんな手を講じて大きわざをして、結局規模が二割は増えなかったということにな

経営規模を広げるということは、実際問題ほとんど不可能であるという所につかっているわけです。そういうことから、いわゆる我々の言葉で云うと、施設型の農業というのは、如何様にでもまだ出来るけれども、土地利用型の農業というものについては、何ともならんというものが、実際に携わっている人はそうは云いませぬけれども、だけど実感としては、そういうことを云わざるを得ない、という状況にあるわけです。雑談ですから、あまり長くなつてはいけませんので、適当に、はしょつて参りますけれども、一口で云いますと、私なんかも牛の場合には、まだ何らかの意味でやり様がある。自由化すると、つぶれる人はちやんとつぶれてゆくでしょう。けれども生きのびる人は、きちつと生きのびる可能性はまだあると思ひますけれども、米の場合にそれが出来るかどうかということになると、これは殆ど絶望的だと云わざるを得ないと思ひます。

そこへいきますと、先っきの学生に話をしてゐる所へもどつて来るわけです。表④の所をご覧頂きますと、現在の農業生産の比率を書いてあるわけですね。米が、やっぱり三十%をしめてゐるわけです。畜産が二七%ですね。という様な形で農業が行われているわけですが、やっぱり当分の間は米というものがかなり大きい部分を占めてゆく、そういう様な農業。それから、恐らく出口がとても見つからんだろうという様な農業に、我々が果してどこまでかかずらわつていけるのかということになると、土地利用型の場合には、とても解答が出て来ません。

全く方法がないのかというと、実は正直、一つだけはあるんでして、土地を利用してやるんだ

から、土地生産性をどんどん上げてゆけばいいわけですよ。これは技術の問題です。土地生産性をどんどん上げることが出来れば、相当程度に、乃至は非常に解決出来るはずだということです。日本の水稲収量を百年間に亘って反収・10アール当りに見ますと、明治の二五年位には大体二百キロ少々、それが現在では五百キロ位まで上っている、倍以上には上っています。日本の農業技術の歴史というのは、米の収量を上げる歴史だったわけです。ものすごい努力をして、百年間で倍にしかならなかつたと、逆に云えばですね。百年で倍にしかならなかつたというのは、一般のインダストリーの世界では、ほとんど考えられんことですね、ばかばかしい様なことだけです。やはり生きもの相手のことです。だから百年間で生産性が倍にしかならなかつたという様なことです。じゃあ、これをどこまで上げることが出来るのかという所にいくと、これは又、非常に難かしい問題になります。

私自身は、個人的には素人なりには非常に樂觀してゐるわけですし、例のバイオテクノロジーとか、そういうものが、これから飛躍的に発展するはずだと思ひます。恐らく二十一世紀のいつ頃かわかりませんが、かなり先には、これはものすごい発展があつておかしくないだろう。云つてみれば、植物の光合成のエネルギー轉換の効率を、どこまで上げるかという話ですから、論理的には十倍なり二十倍に上つてもちつともおかしくない。専門家に話したらとても無理と言われましたが、轉換効率をどうやって上げるかという話ですから、相当のことが出来るはずだと思ひま

す。けれども、それが出来るまでには、少くとも何十年という時間が必要だろう。そういう風な技術の進歩があれば、これは日本だけじゃなくて、世界全体になるわけですから、やっぱり同じだよと、こういうことになるかも知れませんが、土地生産性が上って一番その影響がはつきり出て来るのは、土地の足りない所、土地の高い所ということになりますから、そうなれば、外国との土地利用型の農業の格差というものは格段にせばまる。乃至はそれ以上に日本人は頭がよくて能力が高いですから、その位のものは、いくらでも解決出来るはずだろうなと思ってます。

けれども果してそんな事ができるまでの間は一体どういう風にしていくのかねということになると、先つき云つた学生の解答と結局は同じ様な話にもどつてゆくということになるだろうと思います。安全保障的な観点から農業生産をどう考えるのか。それから国土保全、自然環境保護的な観点からどう考えるのか、それから日本民族の文化との関わりでどういう風に考えるのかという様な所へ帰つて来るんだらうと思ひますし、それからこれまでの牛肉、オレンジの自由化論議と、これからの自由化の話、特に米の自由化の話というのは、その辺で非常に質の違うものになつて来たと言わざるを得ない。米の自由化の要求という様なものを、日本全体として日本人のコンセンサスとして、どういう風に扱つてゆくのかねという所に、これからいよいよ本格的にぶつかつてゆかねばならぬだらうという風に思つてます。後二、三年がそういういろいろな意味で議論をいや応なしに深めざるを得ない時期に入つてゆくんだらうなと思つてゐるわけです。

それで、一つの選択をするということは、必ずそれに対応する犠牲を伴うわけですから、自由化をすることによって日本経済全体として非常に国際的にうまく位置づけをするということによって、反面安全保障的なものを相当犠牲にするのか、そうじゃなくて、安全保障というようなことを考えながら、国際的に非常にぎくしゃくした格好を作つて、それで十年・二十年と泳いでゆくのかと、これは選択の問題だろうと思います。もちろん必ずしも完全に右か左かという選択ではなく、右と左の中間のどこかにスタンスを置くということでしょうけれども、どこにスタンスを置いてもそれなりの覚悟が必要です。そんなことで、私自身が学生から聞かれれば正直な所これは返答は出来ません。出来ないんですけれども総体としては、そういう様な格好であるという風に考えて頂ければいいんだろうと思うわけです。

そうは云うものの表⑤に国際比較という表をつけておきましたんで、これで、ご覧頂きたいわけですが、国土面積で日本とアメリカと比べますと、アメリカが丁度日本の二五倍ですね。ということは日本はアメリカの四％である。その中で耕地面積はどうかといえますと、アメリカの耕地面積は、日本の四十倍あります。これ倍率で書いておいた方がよかったですけれども四十倍あります。人口はアメリカが倍です。従つて、一人当り国土面積がアメリカが日本の十二倍それから耕地面積は丁度二十倍。そこまで勝負あつたよということになるんですけれども、実はその次の所ちよつと見て頂きたい。国民総生産はどうかねということになると、アメリカが日本

表⑤ 農業の国際比較

	日 本	アメリカ	フランス	西ドイツ	英 国	ヨーロッパ 三 国 計
国土面積	37711	937261	54703	24858	24482	104043
耕地面積	4732	189915	18993	7463	7020	33476
耕地率	12.5	20.3	34.7	30.0	28.7	32.2
人口	122091	243565	55627	61146	57118	173891
1人当り国土面積	31	383	98	41	43	60
1人当り耕地面積	3.9	78	34	12	12	19
国民総生産	1966	4235	721	897	560	2180
農業の割合(概数)	2.9	2.0	3.9	1.7	1.6	2.4
農業総生産(概数)	57	85	28	15	9	52
	10億ドル					

の二・二倍です。これは国によって、ちょっと年次が違うものですから、余り正確に云えないんですけれども、大まかに云って、この年では国民総生産が二・二倍で人口が二倍だから一人当り

の国民総生産はアメリカよりは日本の方がまだ低いと、これは為替レートの問題がありますから、いろいろ云い出したら難しいんですけども、そろそろアメリカに近づくかなと、二年位前ですね、という様な数字になるわけです。国民総生産の中で農業の割合は一体何%かねと云いますと日本が二・九%というのは、これは非常に最近の数字です。それからアメリカの二%というのは、これはかなり古い八三年の数字です。八三年頃は日本は三・四%位あったわけですけども、大ざっぱにこういう比率になっている。従って国民総生産に占める農業の比率、割合をぶっかけますと、下にあります様に農業総生産は、日本は五百七十億ドル、アメリカは八百五十億ドルで余り違わんではないかということになって来るわけですね。

これは、そういう風に云いますと、まず、一番最初に云われるのは、それ程に日本の農産物は高いという反応が出て来るわけです。所が、どれだけ高いと云ったって、高いものでもまあ高々三倍。三倍高い位でこの数字というのは、これは説明出来んわけですね。日本の米の値段がアメリカの三倍だ、タイの十倍だという様な事は数字の遊びの様なことです。ここで私も若干数字の遊びをしてみます。ここでは余り大雑把な数字ですから書いておりませんが、農業生産額は日本は五百七十億ドル、アメリカは八百五十億ドルというのを耕地面積でそれぞれ割りますと、一ヘクタール当りの農業生産額というのは、日本が一万二千ドル位、アメリカが五百ドル位ということです。因に一番右にフランス・西ドイツ・イギリス、三国計という数字を上げ

ておりますけれども、三国合せまして農業総生産の大きさはな計算をしますと、五百二十億ドル、日本よりは少いという、これは統計的にそういう数字が出て来ます。ヨーロッパ三国を合せて、一ヘクタール当りの農業生産額というのは、大まかに千五百ドル。アメリカが五百ドルでヨーロッパが千五百ドルで日本が一万二千ドルだ。これは一体何を意味するかと云いますと、これは、極めて単純なこととして、日本は土地が少くて、地価が非常に高いものですから、日本の農業というのは、土地を目茶苦茶に酷使というか、つまった利用をしているわけですね。それは、アメリカの住宅地と日本の住宅地を比べて、過密の度合の差と似た様なものですけれども、日本の土地生産性というのは、この位にアメリカ当りとは違うということになっているわけです。こいつを、さっき云いました様に十倍位上げたい、上げれば何とか農業問題というのは相当程度に解決出来るはずだと云うのが、現在課せられている。殊に、農業の技術者に課せられている課題ではなからうかなという風に思っておるということでございます。

雑談でございますので、一応、この程度で打ち切りにしたいと思います。

(農林水産長期金融協会常務理事)